

飛行機の中で読むだけでフランス語会話ができるようになる本—イントロ（2）

塚田 泉

【フランス語会話の三種の神器】

まず、フランス語の三種の神器といえる言葉を覚えましょう。

- ・ボンジュール（こんにちは）
- ・メルシ（ありがとう）
- ・シルヴープレ（どうぞ）

の三つです。

シルヴープレは、人に何かを頼む時の言葉です。英語のプリーズにあたります。カタカナをそのまま読めば、フランス語として充分通じます。

「ヴ」は「ブ」ではありません。Bの音ではなくてVのほうです。いま区別できなければ、「ブ」でもかまいません。とにかく、日本語を読むようなつもりで、はっきり発音してください。

この三種の神器を駆使できるようになれば、フランス語会話の半分は手に入れたと思ってもよいと言いましたが、それは決してウソではありません。

三種の神器を練習する最適の場は、カフェです。

あなたがエール・フランスの航空機でパリに向かうのだとしたら、搭乗の時から練習が始まります。入口に並んで立っているフランス人乗務員にボンジュールと挨拶しましょう。向こうは「コンニチハ」と言ってくるでしょうが、こっちは「ボンジュール」です。

フランスに着いたら、さっそく適当なカフェを見つけます。最初はなかなか難しいのですが、馴染みの店に入っていきような自然な調子で、さらりと入ります。そして、たとえ初めての店であっても、はっきりした声で、ボンジュールと言うことにしましょう。

とたんにギャルソンたちもニコリして、まるで永年の友だちに対するかのようにボンジュールと言り返すでしょう。ボンジュールの一言だけで、あなたは彼らの世界に即座に加えられ、親しみのこもった扱いを受けることになります。

フランスは挨拶の国です。一日に何度ボンジュールを言うか分かりません。誰にでもボンジュール、ボンジュールと言いつづければよいのです。

ボンジュールを一回言っただけで、その後は何も喋らなくても、その場での会話の半分はそれで済んだと思っても良いくらいなのです。

テーブルにつく時は、隣席の人にもボンジュールと言いましょ。それだけでも、周りの雰囲気

はがらりと変わるでしょう。もうあなたは彼らの仲間なのです。

フランスでは、相手が見知らぬ人であっても、ボンジュールと言って不自然ではないことが多いのです。

ホテルの廊下やアパートの入口で出会った人にもボンジュールと言います。バスに乗る時も、運転手にボンジュールと言いますし、歩道ですれ違ったお巡りさんにもボンジュールと言います。道路を掃除している人にも、半分メルシの意味を含めてボンジュールです。

時には、言う必要のない場合もありますが、慣れないうちは、ボンジュールを使いすぎたとしても、それはご愛敬でしょう。言わないでいるよりも、言ったほうがよい場合が多いのです。

肝心なのは決して臆さないこと。フランス語など熟知しているような顔をして、堂々とはっきりした声で、ボンジュールと言うことです。

それだけでも、フランス語がかなりできるのだらうと思われます。そこが重要なのです。その後は、フランス語会話の初期の作戦として、なるべく喋らないようにします。なまじっか何かを喋ろうとしてボロを出してしまうよりは、黙っている方が賢明なのです。

そうすると、人は多分こう考えるでしょう。彼はボンジュールと言って入ってきたあと何も喋らないから、話すのは苦手なのかも知れない。しかし、多少は聞き取っているに違いない、と。

実際は何も聞き取れていないのですが、多少は聞き取る能力があるに違いないと周囲に思われること、このことが重要なのです。

まったくフランス語が分からないと思われるよりは、仲間意識を持ってもらえます。ボンジュールと言えただけでも、彼らのフランス語共同体の一員なのです。

そして、このことは、盗人やペテン師よけにもなります。パリでは、フランス語のできない日本人旅行者が彼らの標的になることが多いのです。フランス語がほとんど通じず、英語でなんとか誤魔化そうとしている日本人を見ると、スリやヒッタクリが近づいてきます。

だから、フランス語ができなくても、できるような顔をしていることが、盗人から身を守るためにも必要なのです。

フランスには住み慣れているといった顔をして、たとえフランス語はたったの数語しか知らなくても、それを口にする時には、自信たっぷり、堂々と、まるでフランス人が話すかのように明瞭に発音することなのです。

しかも、知っている数語を多用することです。ボンジュールという一語を繰り返しているだけでも、人から見ると、よく喋っているような感じがします。そして、さっきも言いましたように、これがフランス語の世界に入っていく最良の道なのです。

だが、それと同時に、知っている言葉以外は喋らないということも大事です。フランス語会話の上達のためには、多弁と同時に沈黙も必要なのです。

このことは、タクシーに乗った時には特に重要です。タクシーの運転手には悪質な者もいますので、余計なことを喋ろうとしてボロを出すよりは、黙っているほうが良いのです。このことについては、別のブックレット「タクシーでの話し方」に詳しく書きました。

さて、もう一度カフェに入った時の状況に戻りましょう。いつも来慣れた場所だといわんばかりに店に入ったら、ギャルソンたちにボンジュールと言います。彼らもボンジュールと言って、ニコリ笑みを返します。

この時、フランス語を習いたての日本人がよく出す音よりも1ランク上の発音でボンジュールと言いたければ、「ジュ」の音に気をつけることです。シャ・シ・シュ・シェ・ショのシュを濁らせて「ジュ」と発音するのがコツです。

日本人は「ヂュ」と発音することが多いので気をつけたほうがいいでしょう。「ジュ」だけですと、フランス語の「私は」という意味になりますが、これも「ヂュ」ではなくて、シュを濁らせた「ジュ」です。

フランス人の恋人ができたなら、「ヂュ・テーム」なんて言わないで、「ジュ・テーム」(I love you)とってくださいね。

でも、こんな発音の区別についても、さしあたっては考えないほうが良いでしょう。ただ、頭に入れておけばよいことなのです。自分で何度も使い、フランス人の発音を何度も聞いているうちに、だんだん慣れてきます。

それよりも今は、日本語を読むのと同じように、カタカナの表記に従って、明瞭に発音すればよいでしょう。

日本語はラテン系の言語、つまりイタリア語、スペイン語、フランス語などと音が似ていますので、カタカナを読むだけでもかなり良い線まで行けます。多くのアメリカ人よりもはるかに上手です。

さて、自分が坐るテーブルを選んで、腰を下ろそうとしますと、隣席の人たちがチラッと見上げるでしょう。彼らにボンジュールと挨拶すれば、彼らもニコリ微笑んで会釈するでしょう。

時には、話に熱中していたり、余所を向いていたりにして、取りつく島もないといった隣人もいますが、こういう人たちにまで挨拶する必要はありません。そこは臨機応変です。

仮にあなたが隣席の人にドスンとぶつかってしまったら、どうしたらいいでしょう。とっさに言葉が出てこなかったら、「アッ」とか何とか言って、軽く頭を下げればよいのです。

万国共通の身体言語があります。たいていのことはこれで済ませます。頭を下げる、ニコリする、うなづく、首を横に振る、こういった身体言語もフランス語の一部だと思えばよいでしょう。会話の半分はジェスチャーで喋るといったフランス人は多いのです。

謝る時は、頭を下げながら、ついでに「パルドン」と言えば完璧です。ニコリしておけば申し分ありません。

うっかりコーヒー茶碗でも引っかけ、相手を濡らしてしまったらどうするか。「オオ、パルドン、パルドン」とパルドンを連発すればよろしい。ニコリの方は遠慮します。

普通のカフェなら、大事になることはめったにありません。コーヒーをこぼすことにはみんな慣れていますが、それでも騒ぎ立てるような性悪な人がいたら、その時はやむを得ません。フランス語の練習はひとまず終わりです。

手振り身振りで何とか意思を伝えるなり、英語を使うなり、周囲にフランス語のできる日本人がいないか探すなり、適当な方法を取らなければなりません。これは緊急事態ですから、このブックレットの守備範囲を越えています。

何とか切り抜けてください。要するに、茶碗やグラスをひっくり返すようなヘマはやらないように細心の注意を払うことです。

ただ、その場を処理することに成功すれば、これもフランス語の良い練習だったと言えます。あとから振り返ってみますと、自分がかなり進歩していることに気がつくでしょう。

それに、場合によっては、この店のギャルソンたちと親しくなるというオマケが付きます。あなたのフランス語の力量はばれてしまいましたが、今回は「顔なじみ」として受け入れてくれますし、親切にフランス語も教えてくれます。

最後に、緊急事態の注意をもうひとつ。こういう時は、英語でも日本語でも、頭に浮かんだ言葉は何でも口にすることです。

自分の持っている表現手段をすべて自由にすれば、言葉の流れも良くなり、フランス語も自然に出てくるようになります。

黙り込んでしかめっ面をしているよりも、日本語で「コマッタナー」などと叫んでいるほうが、人は好感をもってくれますし、それに時たま日本語の意味が分かって応援してくれる人も出てきます。

さて、こういう特別な事態にでもならないかぎり、あなたのボンジュールで、隣席とも打ち解けた雰囲気になるでしょう。少なくとも抵抗感はなくなります。

すると、隣の人が何か話しかけてくるかも知れません。何を言っているのかさっぱり分からなくても、ニコリしたり、うなずいたりして処理することです。

ここで、あなたのジェスチャーだけの会話能力が試されます。首を横に振らなければならないといった状況はめったにありませんから、ニコリしたり、うなずいたりで大方すんでしまいます。もしも、英語のイエスとノーにあたる「ウイ」と「ノン」を知っていたら、もう立派なものです。

相手が「ジャポネ」とか「ジャボン」とか言って、イントネーションを上げています。相手の言っていることが初めて分かったぞ！ という喜びをこめて「ウイ」と言います。

喜びを強調したかったら「ウイ、ウイ、ウイ」と連発すればよろしい。日本人と言われるのがそんなに嬉しいのか、と相手は思うかも知れませんが。

ボンジュールと誰かがまた言っています。見ると、ギャルソンが目の前に立って、何かを喋っています。もちろん、カフェに入ればボンジュールだけでは終わらないわけで、何かを注文しなければなりません。

さあ、何を取ったらいいだろう。ジュースかコーラが飲みたいんだが、何と言ってよいか分からない。あまりギャルソンを待たせるわけにもいかず、知ってる言葉はカフェだけなので、
「カフェ、シルヴァープレ」と言います。

間違ってもコーヒーなどとは言わないことです。堂々と、はっきりした声でカフェと言います。ジュースが取りたかったら、「ジュ」と言えばよいし、コーラだったら「コカ」でいいのですが、今回は仕方ありません。

ジュースの「ジュ」は、「私は」を意味する「ジュ」と発音がちょっと違いますが、今はそんなことに気にする必要はありません。両方とも同じだと思っていけばよいのです。

どうしても毛色の変ったものが欲しい時は、
「ムニュ、シルヴァープレ」と言います。

ギャルソンがメニューを持ってきてくれます。絵入りのメニューなら簡単です。自分の欲しい物を指差して、「シルヴァープレ」だけで済みますか、あるいは、「これ」という意味の「スラ」をつけて、
「スラ、シルヴァープレ」と言います。

ケーキ類がショーケースに入れてある店も多いので、その前へ行って、自分の欲しいタルトなどを指差して、同じことをギャルソンに言えばよいわけです。

ギャルソンがカフェをテーブル、いやダブルまで運んできてくれたら、
「メルシ」と言きましょう。

フランスではカフェを注文すると、エスプレッソを持ってきます。これは、エスプレッソと発音してもかまいません。

カフェがもう一杯飲みたかったら、今度は、
「エスプレッソ、シルヴァープレ」と言ってみましょう。

濃いエスプレッソを続けるのがイヤだったら、
「カフェ・アロンジェ、シルヴァープレ」と言います。

「カフェ・アロンジェ」とは、アメリカン・コーヒーのことです。カフェ・アメリカンと言っても通じないことが多いので注意してください。

なお、会話というのは、相手に伝わるか伝わらないかが問題であって、いちいち文章を組み立てているよりも、単語だけで済むところは、すべて単語を言うだけにしておくことが重要です。

カフェを注文する時は、
「カフェ、シルヴァープレ」と言うだけで充分です。

会話入門書を見ますと、「ドネムワ・デュカフェ、シルヴァープレ」とか、「アポルテムワ・アンカフェ、シルヴァープレ」などという長ったらしい言い回しが書かれてますが、私自身こんな表現はめったに使いません。

そういう言葉は、フランス語に慣れてくれば、自然に出てきます。自然に出てくるようになるまでは、単語を言うだけですませ、余計なことは喋らないということが鉄則です。

コーヒーを注文する時にはどう言おうかなどと考えていますと、現在進行中の相手の言葉を聞き逃しかねません。

フランス語会話を習得するコツは、相手に伝えることだけを考え、それ以外のことは話そうと思わないことです。あとは黙って、むしろ「聞き取る」ことにかけてねばなりません。

その意味で、カフェを飲みながら誰とも話さずに過ごす時間、この黙っている時間が意外と重要なのです。

フランス語会話の上達のためには沈黙の時間が貴重だということを言いましたが、その時間はまた、フランス人をじっくり観察するのに役立ちますし、またフランス語を聞き取る練習にもなります。

カフェには、人間を眺めるために来ている人も沢山います。店内にいるフランス人はもちろん、いろいろな国から来ている人を見ているだけでも飽きないのですが、特に、窓ぎわやテラスに坐って通行人を眺めるのを最大の楽しみにしている人も多いようです。

周囲で話されるフランス語を聞いているのも、内容が分からず、ただリズムやイントネーションを聞いているだけでも面白く、またそれだけでもフランス語の習慣が身についてきます。

フランスのカフェでは、長時間いても何とも思われませんし、ちょっと街を散歩して、次の店に入るのも一つの方法です。あちこちハシゴしても、レッスン代だと思えば安いものです。

タバコを吸う人が気になるのは、禁煙席と喫煙席の区別だと思いますが、禁煙席には **non fumeur** と書いてあるか、あるいは禁煙のマークが貼ってあります。喫煙席は **fumeur** です。

まれに **mixte** と書いてある店もありますが、これはどっちでも良いということで、ユーモアでしょう。近いうちに、フランスのレストランやカフェでタバコが全面禁止になるという話がありますが、愛煙家にとっては気になることです。

ギャルソンがカフェなどを運んでくる時に、勘定書も置いていきます。ダブルの上に5ユーロか10ユーロの札を出しておけば、ギャルソンがそれを取りに来て、お釣りを置いていってくれます。

この時は決して「シルヴァープレ」などとは言わないこと。お釣りはチップだと思われてしまいます。

最近では、若者たちの中にはチップを渡さない者も増えてきましたが、年配の人たちはたいてい渡しています。外国人旅行者も勘定書の5%ぐらいを目安に、小銭を置いてきたほうがいいでしょ

う。

最後に、「オルヴワール」（さよなら）と言って、店を出ます。三種の神器「ボンジュール」「メルシ」「シルヴァープレ」のほかに、この「オルヴワール」と、すでに挙げた「パルドン」「ウイ・ノン」を加えて、六種の神器ということにします。

次は、「タクシーでの話し方」をぜひ読んでください。

飛行機の中で読むだけでフランス語会話ができるようになる本としてお勧めするのは、塚田泉著『へそ曲がりフランス語会話』ビワコ・エディション近刊です。